仏教学との出逢い

吉元信行

仏教学会新会員の皆さんこんにちは。仏教学会の会長ということでこの講演を引き受けた次第です。仏教学会会員になられたことを心から歓迎します。

実はこのテーマについて、当初は「仏教学は面白い」というようにしようと、思っていたんですが、どうも、仏教学会の講演のテーマにはあまり相応しくないのではないかと思いまして、今回のような「仏教学との出逢い」というテーマにいたしました。

今スクリーンに映像が見えてると思いますが（パワーポイント使用）、ちょうど本学のサンクンガーデン南のシダレザクラがもう散りかけて新緑が見え始めた、そう言う時を見計らって私が撮った写真を付けたんです。ちょうど、新入生の皆さんの今のような時期にぴったりの写真ではないかと思いまして、お見せしました。

まず私が、どうして「仏教学との出逢い」というテーマをつけたかについて申し上げます。つまり、私が仏教学とどのように出逢ったかということですが、この「出逢」いの、「逢」という字がふつうの「出会い」と違います。この「出会い」の方の「あう」は、私の方から積極的に会うという意味での出会いであるとしたら、こちらの「出逢い」は、どちらかというと向こうの方から会ってくれたというような意味での出逢いという、そういうことで私はこの「出逢い」という題をつけたわけです。私にとって、仏教学に関して言えば、もうほとんどが私の方から求めて、

そして出会ったというようなことはあまりない、むしろこの「出逢い」がほとんどであるという意味で、わざわざ「出逢い」という言葉を使っております。そういうことで申し上げるんですが、まずどのような「出逢い」があって、そして仏教学の研究者或いは教育者としての現代の私があるのかと、そういうことをこれから申し上げていこうかと思うわけです。

今から私が申し上げようとする意図というのは、仏教学を初めて学ぶ学生さんのために、仏教学を学ぶということはどういうことなのかということを、私の経験を通して知っていただくということです。私の通りにせよ、という意味では決してありませんが、私にとっての仏教学の学びはこういうことであったということでお話を申し上げたいと思います。

私は大分県の片田舎のちいさい寺の長男として生まれました。そして、この大谷大学に来ることになったんですが、これには随分、紆余曲折がありました。ここで始めて告白することになると思いますが、実は私は大谷大学に最初から来たかったわけではないんです。正直なところ、ある国立大学を目指していたんですが、落ちまして、そして、止むなく大谷大学に来ることになったと、こういうことを最初に申し上げておきたいと思います。

そのことに関係してくるのが「恩師との出逢い」ということです。この恩師というのは大分県の片田舎の私の郷里のある住職との出逢いであります。この方は、あの華かなりし大谷大学創立当初の真宗大学の出身でした。わたしは、今言いましたように、国立大学を目指して一生懸命勉強していました。ところが、大変懇意であったその住職が、わたしに「お前は大谷大学に行け、その大学はすばらしい大学だから、お前は大谷大学に行くべきだ」と盛んに勧めてくれたわけです。私は「お金がかかるから、学費の安い国立に行きたい」とこういうふうに言って盛んに論議をしたんですが、結局のところ、この恩師との約束で、「もしも、その国立を落ちたら、他の私立に行かずに大谷大学に行く」という約束をしてしまいました。それで見事に落ちましたので、風呂敷一つ持って、この京都駅に降り立ち、そ

して、寺町今出川を上がった所に育英寮という寮がありまして、その育英寮の寮生となって大谷大学に入学したわけです。

そのころの大谷大学は、一旦入学したあと、三回生になって学科を自分で選ぶという時代でした。即ち大谷大学の一般教養課程の学生としてまず一回生、二回生を過ごし、専門課程の三回生で学科とゼミを選ぶという方式でありました。ですから何も仏教学ということを意識しないままに、私は大谷大学で一回生、二回生を過したわけです。私のいた頃の昭和三十年代というのは、大谷大学は大変活発な、学問も華やかな時代でした。たくさんの偉い先生方がおられました。後で詳しく申しますが、舟橋一哉という先生が、ちょうど一回生の時の今の「人間学」にあたる「仏教入門」という講義を担当され、それがご縁で、私は原始仏教を専攻することになりました。それ以外にも原始仏教が専門の佐々木現順という先生がおられました。この先生はアビダルマでも有名な先生です。また櫻部建先生、この方も原始仏教やアビダルマの専門家ですが、こういう三人の直接関係のある先生に学びました。

私が原始仏教を選んだのは、実は舟橋一哉先生の一回生の時の、その講義が大変面白かったからです。大変わかりやすい講義でして、偉い学者ですけれども、一回生の学生向けに、非常にひょうきんな、いろいろ身振り手真似をまじえた大変面白い講義でした。つい私は、その先生のゼミを選ぼうということになったわけです。

他にもまだインド大乗仏教で有名な山口益先生、もっとお年を取った方には、例えば鈴木大拙先生なんかもまだ現職の教授で、時にアメリカから帰ってきて大谷大学で講演をするというような時代であります。真宗学の金子大栄先生や曽我量深先生、或いは宗教学の西谷啓治先生、皆さんはあまり名前はご存知無い人がいるかもしれませんが、ちょっと年のいった方にとってはびっくりするような有名な先生方です。まだ他にも真宗学の名畑応順先生や正親含英（おうぎがんえい）先生、山田亮賢先生、富貴原章信先生、横超慧日先生、安藤俊雄先生など、仏教学の大家たちが名前を連ねていました。そういう中で私は仏教学を選び師に恵まれて学問ができたわけです。

ちょっと話は脱線しますが、本学入学前にびっくりしたことがあるんです。私の高等学校の時の古文の時間に、たまたま歎異抄のある条が教科書に載っていたんです。そして、その教科書における歎異抄の校訂者が大谷大学教授、多屋頼俊という先生でした。高校のとき、たいしたことはないと思っていた大谷大学にこんな偉い先生がいるのかと、認識を新たにしたことがあります。この方は国文学の大変有名な先生でして、法蔵館の『仏教学辞典』の編者の一人にもなっています。そういう様々な先生がいて、私にとってはそういう意味では大変恵まれた環境に降り立ったということになります。

ところが三回生になって専攻した原始仏教（当時は第一講座と称しました）の学生、実は私一人だったんです。先輩に広瀬さんという方がいまして、これも一人。すなわち四回生に一人、三回生に一人、の二対一で授業を受けるというようなゼミでした。そして私と広瀬さんには、同じ専門の佐々木現順先生もいるは、櫻部先生もいるは、また近い専門では雲井昭善先生（インド学）あるいは佐々木教悟先生（インド仏教史）もいました。私一人にそういう同じような専門の先生がたくさんいるというような、そういう恵まれた環境で勉強ができたとこういうことです。そこで二年間の専門課程の学びを済ませまして、そしてさらに大学院に行きたいということになりました。

私が大学院に行くには、さっき言ったように田舎のちいさい寺ですから、とても大学院に行かせるような財力があるはずがない。もう私はアルバイトで大学院に行かざるを得ない、すなわち学費から生活費から全部、私が持たなければならないという状況になりました。

そこで私は絶好の方法を考えつきました。これも育英寮出身のある先輩との出逢いが縁となって、京都市内の民間の更生保護施設の職員として働きながら大学院に行くということになりました。その更生保護施設というのは、いわゆる非行少年とか刑務所帰りの人達を収容して、その人達に対していろんなケアをするところです。その仕事は殆ど夜の仕事で、夜に泊り込んで彼らと接し、寝食を共にしながら、彼らの補導援護をするという仕事をしたわけです。

そうしましたら、どうもそこでの対象者に対する私の処遇というのが上手（うま）くいくということに気が付いて、はっと考えてみたわけです。

その時にふと思い当ったことが実はあるんです。他の職員は刑務所の看守あるいは警察所の所長をした人、また少年院の教官をした人、そういうベテランの人ばかりでしたけれども、私だけが大学を出たばかりで、それも全くそういう方面の知識無しにそこに放り込まれ、そのままその仕事をさせられたのです。その仕事が大変上手くいくというのはどういうことということを考えた時に、はっと思いついたことがあります。というのは私が大谷大学で学んだ仏教は、原始仏教すなわち釈尊の時代の仏教です。そこではカウンセリングということをやらなければならないわけですが、私は見様見真似でカウンセリングをやらざるをえませんでした。その私のやっているカウンセリングというものが、上手くいくということは、どうも私の学んだ原始仏教に何かあるんじゃないかということに気が付いて、いろいろ調べなおしてみました。そしてカウンセリングについても詳しく勉強してみました。

さらにソーシャルワークやケースワークなどの様々な勉強をしてみましたところ、どうやらこのゴータマ・ブッダという方は、当時の偉大なカウンセラーではなかったのかということに気がつきました。私は原始仏教を学んで、そして、そこに行ったわけですから、私は自ずから仏教カウンセリングをしているのではないかと、こういうように思うようになりました。そこで、修士論文に、「原始仏教における対機説法の体系―仏教カウンセリング試論―」というようなテーマの論文を出したのです。まさにブッダは偉大なカウンセラーであり、そして仏教というものは、別の観点から言えば、大きな仏教カウンセリングの体系である、こういう様なことをこの論文で書いたわけです。

そして、その後その修士論文の序文の所だけをピックアップしまして、『犯罪と非行』という雑誌に投稿したんです。それが三十五年前に発表した論文です。この論文が、その後どうしたことか掘り起されました。つい四年程前に、龍谷大学の西光義敞先生が編著で『親鸞とカウンセリング』（永田文昌堂）という本を出す時に、「吉元さん、あなた

の論文は三十年以上も前からこういうことを言い出したという点で面白いから入れたい」とこういう要請を受けました。そして、この本の巻頭論文に、私が三十五年前に書いた論文「カウンセリングにおける仏教的想念」がまた採用されたということで、やはり私がその時に考えついたことに間違いはなかったということを改めて認識した次第です。その施設には七年間程勤めまして、その後本学でささやかながら一応研究の場所を与えられまして、そこで指導教授の指導を受けるながら学問を続けることになりました。

その過程において私が痛感したことは、仏教カウンセリングをやるには、やはりそれなりの学問的背景が必要であるということでした。西洋のカウンセリングは、心理学という深い学問体系の上に成り立っている様に、仏教カウンセリングもきっと基礎的な深い学問体系があるに違いないと思いました。そういうことで、私はこの大学で研究の職に就いてから、仏教の心理学、あるいは仏教の哲学を扱うアビダルマの分野の学問の方に力を注いで参りました。けども私は、その施設を辞めて以降も、保護司という地元の民間のボランティアとして、犯罪前歴者や非行少年の補導の仕事を今まで続けています。その仕事をずっと続けながら、一方でいわゆる重箱の隅を穿るような文献研究としての原始仏教やアビダルマ、或いは大乗アビダルマ、唯識、そういうような学問を続けてきたわけです。

まさに仏教学という学問をするには、文献学というむずかしい作業が必要になってまいります。原始仏教をやるにはパーリ語をやらなければならない、またアビダルマをやるにはサンスクリット或いは漢文またチベット語、こういうような様々な言語をマスターしなければならないわけです。こういうことで、私も死にもの狂いでこの学問の道に入って行き、そのことが現代のこの大谷大学で研究と教育の職を与えられているもとになったんだと思います。

ですから、皆さん方がこれから学ぶ仏教学というものは、必ずや仏教を活かすための基礎学であるということを忘れて欲しくないと思うんです。というのは皆さんがどのようなところに就職してもその就職先の人が必ず言うことがあります。大谷大学の学生、特に仏教学科出身の学生なんかは違う、何かある基礎ができている、あることでレポー

トを書かせても他の大学出身者とは違う、というようなことを私が就職委員として企業訪問したときに聞いたことがあります。

やはり仏教学をやるには、それなりの文献学という基礎的な研究がどうしても必要です。ですから、これは苦しいしんどい学問です。そのしんどい学問であるけれども、その、背後には面白いことが待っていると、そういう風に考えてもらったらいいかと思います。ですから苦しい文献学も必要ということです。

ちょうど私が学問研究に励んでいた頃ですが、私のところにあるイギリス人のご婦人が訪ねて参りました。この方はイギリスのソーシャルワーカー、すなわち保護観察官（犯罪者を扱う国家公務員）でしたが、日本に留学に来たそうです。東京の社会事業大学に留学に来て、わが国社会福祉の第一人者、吉田久一という先生の指導のもとに、日本の仏教と社会福祉の勉強をしに来たということでした。なぜかというと、西洋の社会福祉には限界がある、その限界を打開する手段を摸索していたところ、鈴木大拙の本に巡りあった。鈴木大拙という先生は、先ほども出てきましたが、大谷大学の教授でしたね。そして沢山の英文の本を出している。その中に西洋のソーシャルワークの限界を克服する手段があるということに気が付いたとのことです。

ということで、その詳しい内容については今日お話する時間はありませんが、要するに仏教に何かがあるということで、彼女は日本に勉強に来て、そして私の先程の論文に目をつけた。それで私の所にもやって来たというわけです。そして彼女はその吉田久一先生の許で英語の論文を書いて、イギリスに帰りました。その英語の論文というのが「ソーシャルワークにおける仏教理念の活用」というようなテーマの論文でありました。この論文に私は大変驚いたわけで、私が書いた論文の趣旨とぴったりでした。西洋人から見た仏教理念の活用法ということで、そこに私はびっくりしました。そこで、有縁の人達、ちょうど司法福祉という分野、すなわち保護司、家庭裁判所の調査官、保護観察官、そういうような仕事をしている人達の集まりがありまして、その人達と一緒に、そのご婦人の名前はコーデリ

ア・グリムウッドというんですが、彼女の書いた論文を輪読し、結局、翻訳をすることになりました。その論文には日本人を瞠目させるほどの内容が書いてありました。それを翻訳して先の私の論文と同じ『犯罪と非行』という雑誌に共同執筆ということで発表したわけでありますが、これは非常に評価を受けました。

このようなことが縁となって「仏教司法福祉研究会」という共同研究の会ができました。そのメンバーに社会福祉法制の権威である龍谷大学の桑原洋子先生（現皇学館大学教授）や当時家庭裁判所調査官であった東一英氏（本学哲学科の出身で、現愛知新城大谷短大教授）などがいます。このような先生方と一緒に研究をし、その結果を発表し、ここに既に本になっております（桑原洋子編『仏教司法福祉実践試論』信山社・一九九九年）。さっきのグリムウッド女史の英語の論文の日本語訳もそこに入れてます。それからそれを基にして我々は「仏教司法福祉」という言葉を作りまして、司法福祉にこそ仏教理念を活用すべきであると、そういう一つの仮説を立てまして、そこにいかに活用すべきかという事例研究を入れ込んで、このような本を作ったわけです。

このようにして私は仏教司法福祉ということに興味を持ちながらも、また大谷大学では原始仏教・アビダルマという学問をずっとやってきたんですが、インドの仏教をやっていたわけですから、インドの仏跡を参拝しなければならないということで、仏跡参拝の機会を与えられました。まさに「インド仏跡との出逢い」ということになります。

そこで私は仏跡を辿った時に、パトナから王舎城までのあのルートに特に惹かれました。それはちょうどゴータマ・ブッダが最後の旅、即ち八十歳になった時に王舎城を出発して、そしてパトナ、さらにその北の方へとクシナガラまでを旅をして、そこで最後に亡くなっていった、そのブッダ最後の旅のルートであったわけです。そのブッダの最後の旅のルートをそのまま辿りたいという衝動に駆られました。最初は慌ただしく仏跡巡りをしたのですが、どうもそれでは満足せずに、それから二年後に、私が中心となって「ブッダ最後の旅とカピラ城」という研修団を結成し、仏跡踏査をいたしました。どうもこのブッダ最後の旅の目的は、生まれ故郷のカピラ城に行きたかったんじゃないか、

こういうセンチメンタルな仮説を立てまして、私たちは王舎城からクシナガラまでを辿り、それから更にルンビニーからテラウラコットというカピラ城跡までをずっと辿りました。その時の旅行記というようなものを一緒に行った人達で書いて、文集にして出版したのがここにあります仏陀最後の旅とカピラ城史跡踏査団編『仏教の原点を訪ねて』（文栄堂・一九八三）という本です。

この本が母体となって、今の私の著書であります『人間仏陀』（文栄堂・一九九一）という本ができたんですが、いずれにせよ『ブッダ最後の旅』は私にとってはまさにバイブルのようなものです。これは岩波文庫から中村元先生の訳が出てまして、四百円くらいでポケットに入れられるくらいですから、私はこの本を持ってブッダ最後の旅路を辿ったわけです。このようにして私は「ブッダ最後の旅路」に出逢ったわけです。そしてそのことが後になって非常に大きな意味をもってくるということは、また後で申し上げます。

次に、「インドという異文化との出逢い」について申し上げます。インドには様々な魅力のあるヒンドゥー文化というものがあるわけで、仏教文化もその中から花咲いていったわけです。特に、仏跡との出逢いに関しましては、今から少しスライドを用意しておりますので、お見せしてみたいと思います。普通の仏跡の写真は皆さん見たことがあるとは思いますが、ちょっと珍しい写真をお見せしたいと思います。これが私の拙ないホームページですが（http://homepage1.nifty.com/yosshin）、この写真がブッダの故郷ルンビニーからカピラ城への道を行く牛車です。ここが私の大好きな場所であります。だからこのホームページのトップにこの写真を入れているわけです。特に、お見せしたかったのは、サンチーという仏塔の近くのサッダーラという新発見の仏教遺跡（ストゥーパの遺跡）の写真です。その発掘されたばかりの場所に行く機会に恵まれました。

ここには行った人はまだほとんどいないと思うんですが、これは四年ほど前のことなんです。このサッダーラという遺跡は、サンチーの近くですが、ここに行くには、ジープとか四輪駆動車でしか行けないような大変な悪路です。

こういう所にストゥーパが崩れてあります。この様に欄楯もバラバラに崩れています。この欄楯をよくよく見ますと（写真を放映しながら）、ここら辺りにはちょうどサンチーの第二塔と同様な文様が入っていますので、紀元前2～3世紀のかなり古いものであることがわかります。このサッダーラという遺跡に行くことができたということは私にとってもまた大きな意味を持つと思います。

インドのサッダーラというサンチーの南西十五キロ程離れた所、道から離れてジープでしか行けないような所にも行けたし、仏陀の八大聖地の遺跡にも全部行けたし、仏跡だけでなく、東インドのオリッサ州や、南インドのマドラスあたりにも行きました。ボンベイやアジャンターにも何回か行きました。明後日くらいからＮＨＫのＢＳ２で連続してインドの番組があります、皆さん是非、見てください。アジャンターやエローラの遺跡がふんだんに出てくると思います。

それからちょっと、今から新入生のためにアトラクションをしてみたいと思います。インド半島の東のつけねあたりにちょうどオリッサ州という所があります。このオリッサ州に行く機会がありました。いろんな仏跡がここにもあります。密教関係の遺跡がかなりあるんですけれども、今日は仏教には直接には関係のないヒンドゥー文化のある映像をお見せしたいと思います。オディッシーダンスというダンスを見てください（スクリーンにオディッシーダンスのビデオ放映）。オディッシーダンスはジャガンナート（プーリーにある有名な寺院の本尊）という神様に捧げる踊りなんですね。しばらく音楽と踊りとを鑑賞していただきます。

まず踊子がジャガンナートの神様にお祈りのポーズをとり、花びらを落としてますね。ちょっとスキップして、踊りの最後の所をお見せしたいと思います。実は今のオディッシーダンスなんですけれども、我々と縁が遠いかというと決してそうじゃないんですね。今からちょっとした映像を見てもらいます。この方に見覚えがあるでしょう。本学博士課程のインドからの留学生ショバさんですね（スライド）。これは私の還暦記念祝賀会の時に踊ってくれたんで

すけれども、あのショバさんの故郷がオリッサ州なんです。まったく今のと同じ衣装でしょう、オディッシーダンスは本学のショバさんも踊れるんです。

次に申し上げたいのは、「学生たちとの出逢い」ということです。仏跡研修などでインドに学生たちを連れて行っていつも思うことは、私自身もインドにいつも感激するんですけれど、それよりもっと学生さんがインドに行って、インドの仏跡に触れて、そしてブダガヤの菩提樹に触れて、金剛宝座に頭をつけて、感激している、そういう学生たちとの出逢いです。このことがまた私たちにとっては、非常に大きな意味を持つように思います。

最後に「ビハーラとの出逢い」について申し上げます。あまり時間が無いので端折って申しますが、今から十二・三年程前に、私の研究室に田宮仁という先生が訪ねてきました。この田宮という先生は大谷大学の出身、文学部宗教学を専攻し、大学院で真宗学、それから仏教大学の社会事業研究所に助手として就職し、そこで社会福祉の勉強をしました（現飯田女子短大教授）。丁度その頃、私の所に来たのですが、その理由はこういうことでした。

今、今といっても十二・三年前のことですが、日本にホスピスというターミナルケア施設がある。ホスピスというのは死を間近に控えた人達を、延命ということを目的とせずに、苦痛を除いて、そして、できるだけ安らかに過せるようにサポートする、そういう施設です。ところが、アメリカには二〇〇〇施設もあるのに、日本には六ヶ所しかない。その内のほとんどがキリスト教系のホスピスで、そこにはチャプレンという牧師さんがいて、そして仏教徒である日本人がそこでアーメンといって看取られているが、仏教徒としてやるせない。こういう風に言うんであります。それで何とか仏教のホスピスを作りたいということになりました。そして仏教ホスピスといってもホスピスはキリスト教の言葉だから、木に竹を接いだような言い方になる。仏教ホスピスにあたる何かいい言葉を作りたいというのです。そこで色々考えました。そして一つ思い当たった節があるのは、古代の仏教の教団にもそのような施設があったということでした。

それは「アーログヤビハーラ」、病を癒す僧院という意味です。そういう様な施設がインドには古くからありました。最も古いものはアショーカ王が作ったものですが、現在のパトナのクムラハールという遺跡にあります。アーログヤビハーラでは長いから、最後のビハーラをとろう、そういう仏教ホスピスの意味で「ビハーラ」という言葉を作りました。そして田宮先生は「ビハーラ」の提唱をいたしました。それから「京都ビハーラの会」という会を結成し、看護婦さんや病院関係者あるいはケースワーカーまた心理学者、いろんな人達がメンバーとなって研究会を持ちました。その研究会は月一回仏教大学の四条センターでいたしました。

そこで、ビハーラの理念の構築をするということになりました時に、私の思いついたのが先ほどの『ブッダ最後の旅（大パリニッバーナ経）』であります。この『ブッダ最後の旅』は、釈尊が死に行く過程、すなわち釈尊のターミナルステージである、こういう立場からこの経典を読もうということになりました。看護婦さんたちと経典を読んでいた時に、今まで仏教学者として読んだその『ブッダ最後の旅』とは全く違う視点が見えてきたんです。すなわち、ブッダをターミナルの患者として見る立場ですね、そしてアーナンダをその介護者として見る、そういう視点が見えてくる。その視点でこの経典を看護婦さんたちと一緒に読んでみると、実にいろいろな面白いというか、興味深い点がたくさん出てきました。その『ブッダ最後の旅』をもとにしてビハーラの理念を構築していったのです。そしてその後、「大乗の涅槃経」を読むことになりました。この「大乗の涅槃経」というのは、先程のブッダ最後の旅である「小乗の涅槃経」を素材として、釈尊の入滅を大乗的に扱った大乗経典でありますが、この経典をまた読みました。

そこでは、阿闍世王が、釈尊の臨終の間際に、釈尊に悩みを持って会いに行くというシーンがありますが、そこら辺りをずっと読んでいきました。その様にして読んでいきますと、そこに阿闍世王の心の変化、また最後にブッダと会った時の阿闍世と王とブッダとの対話などいろいろな興味深い問題が経典に出てきまして、その様な小乗と大乗の涅槃経というものを輪読することによって、そこにビハーラの理念、すなわち仏教におけるターミナルケア理論とい

うものが構築されていきました。そしてついに今から六年程前ですが、新潟県長岡市長岡西病院という病院がありますが、その院長が田宮先生のお兄さんであり、その総合病院を作ったのです。その病院の一番最上階の五階に「ビハーラ病棟」があり、「ビハーラ」という初めての仏教のホスピスが出来たということになります。そこの中央には大きな仏堂、つまりお釈迦様を祀ったお堂があり、そこで毎朝、勤行が行われ、法話が行われ、病院のお医者さんや看護婦さんや患者さん達がそこにお参りをしています。そしてこのビハーラでは専属のビハーラ僧というお坊さんがいて、死にゆくまでの心のケアと、そして最後の看取りをするという様なそういう施設が出来たわけです。

今まで申しましたように仏教というと、堅苦しい、抹香くさい、そういうイメージを皆さん持っているかもしれませんが、決してそうではないということがお解りになったと思います。私自身もそういうイメージを持って、そして本当は嫌々大谷大学にやって来たけれども、そこにいろんな先生方、恩師との出逢い、友人との出逢い、学生との出逢い、そういうような出逢いの中に現在の私がいるわけであります。そのようなことで、仏教は決して難しいことばかりではない、難しいながらも、それは文献研究という一つの作業である、作業の先にはある完成したものが見えている、そういう気持ちで仏教を学んで欲しいと思います。この後に「大乗の菩薩と仏教福祉」ということもお話したいと思っていたんですが、時間が来ましたので割愛して、とりあえず新入生の皆さんにこういうことを申し上げて、仏教学は面白いということを本当は伝えたかったわけであります。拙い話でしたけども今日の講演はこの辺で終わりたいと思います。どうも清聴ありがとうございました。

（本稿は、平成一四年四月二十四日、大谷大学メディアホールで行われた仏教学会新入会員歓迎記念講演の筆録に筆者が若干補訂したものである。）